

1966年(昭和41年) 創部のころ

1962年9月、米田（文学部広報学科）を中心にラグビー好きの同好者が結成を呼びかけ、監督を多田政義先生（金属工学科）にお願いして同好会が代々木校舎に産声をあげた。

練習は近くの東京大学駒場グラウンドの片隅を借りて楕円球を追った。その駒場グラウンドでは日本一古いクラブチームである「エリス」対「エーコン」の練習試合に、助っ人で敵、味方に分かれて参加したこともあった。やがて駒場グラウンドが東京オリンピックの女子陸上選手用に改修され使えなくなり、練習は相模原市の付属相模高校グラウンドに移った。

ラグビー同好者の集まりからラグビー部への第一歩として、専用グラウンドの確保が急務であった。63年、大学は湘南（平塚市）に校舎を建設中で、その地で比較的平坦な場所を選んで練習していた。その中でも、現在のラグビーグラウンドの場所は背丈ほどある草が生い茂っていた。その草を刈り、全員で何度となく凹凸の補修を繰り返し、走り込んだ場所であった。その一方、創部から3年間はとにかく、ラグビーの灯を消さぬため、学生が自主運営する東海大学体育会での公認部になることに力を注いだ。

多田監督、部員たちの対外活動により、体育会での格づけが同好会～準公認部～公認部とステップアップし、現在、競技場のポールで見られる旗はこの時得た体育会公認部の旗である。その後、大学当局の協力を得て65年には我々が既成事実として使っていた今の場所がラグビーグラウンドとして整備されていった。

グラウンドができると、翌66年には春休み、秋休みを利用して教室に貸し布団を持ち込み、横浜市立大学、東京理科大学との合同合宿が実施された。練習試合では横浜本牧のYCACでの外国人チームと対戦。当時、芝のグラウンドといえば夢のまた夢の秩父宮ラグビー場以外頭になかったが、その芝の上でのゲームや試合後のアフターマッチファンクションでのつたない英語の歓談は大いに戸惑いを感じた。

その後、仁藤、有馬、八下田、安斎、小地沢が入部しラグビー部としての体をなした。

（米田博迪、坂本篤信）



理工科系リーグ戦

監督 相澤史郎
主将 荻野行男（3年生）

理工科系リーグ戦（戦績不明）

全国地区対抗大学大会
都予選敗退

1966年度（昭和41年度）卒業

坂本 篤信（電子）/主将		

1967年(昭和42年) クタクタの体でグラウンド整備した日々

1964年入学組は12名がラグビー部に入部した。高校時代、ラグビーを経験した者もいて、2年生と合わせると部員数もそろい、フォワード、バックスに分かれての練習が毎日できるようになった——そんな時期ではなかっただろうか。

湘南校舎のグラウンドは、一応ゴールポストが立っているからラグビーグラウンドだと分かるものの、実態は畑地だった。晴天時は砂ぼこり、雨天時は泥まみれ。その中で、とにかく「走れ、走れ」の毎日だった。練習を終えるとクタクタになったが、疲れきった体で、グラウンド内に転がっていたり、埋まっていたりする石を拾い、整備に努めたものだ。それから唾が出なくなるまでボール磨きをしたことを思い出す。ふと見上げると、夕日の中、富士山が美しくそびえ、練習から解放された気分もあって心が癒やされる思いがした。

春の合宿は、湘南校舎で行った。寝泊まりは校内の教室に机を並べ、上に布団を敷いた“簡易ベッド”。春休みだったが学生食堂は営業していて炊事しなくてすみ、ありがたいことだった。

当時の3年生、4年生の専門課程は、代々木校舎などに分かれていて、授業後、湘南グラウンドでの練習に参加することがほぼ不可能で、結果的に東海大ラグビー部は1、2年生主体のチーム編成とならざるを得なかった。そのせいもあって他大学と盛んに練習試合を組んだが、ほとんどは100点ゲームと負け続けた（実際、私も2年で引退した）。思い出したくない記憶だが仕方ない。

当時ラグビー部は同好会であり、体育会からの予算が少なかった。同僚の森君が、大学の健康管理室から学生の身体検査のアルバイトを獲得し、部費の補填を行った。このアルバイトもその後数年継続されたと聞いている。

今、昔のチームメートと秩父宮や国立競技場に行き母校を応援する。自分たちが草創期を担ったチームがここまで強くなったんだなあと本当に誇りに思う。

(後藤明史)

理工科系リーグ戦

監督 相澤史郎
主将 有馬美照 (3年生)

理工科系リーグ戦 (戦績不明)

全国地区対抗大学大会
都予選敗退

1967年度 (昭和42年度) 卒業

萩野 行男 (生機) /主将		
平木 大作 (通信)		
後藤 明史 (土木)		
森 知忠 (建設)		
西村 継志 (通信)		
仁藤 関紀 (応物)		

1968年(昭和43年) 鮮明に思い出す大敗

私は1965年に入部、小兵であったがポジションはフォワードのフッカー。今のように大型選手も少なく、なんとかやれた。

当時の湘南校舎は建設途中であり、毎日作業用トラックが土煙を上げて走行している状態であった。

キャンパスの境界には塀もなければ柵もなく、どこからでも入れる状態であり、周りは一面の畑だった。ラグビー場は現在の位置にあったが、ただの長方形の土地だった。サッカー部と共用で使用していたが、いつの間にか自分たちで測量し、建設現場で丸太をもらい受けてゴールポストを作成、ラグビー部専用グラウンドとして既得権を得たと記憶している。

部員のほとんどは小田急線通学で練習が終わると体もろくろく洗わず、本数の少ない電車に乗るため、今の東海大学前駅(当時は大根駅)に急いで暗闇の山道を歩いたものだ。

入学当時の部員は30人足らず。授業は代々木校舎と湘南校舎に分かれており、全員が集まるときはほとんどなく、練習試合で顔を合わせることが多かった。小生も4年時は授業が代々木校舎のため練習にはほとんど参加できなかった。

当時の部員は理工系が多く理工科系リーグに加盟していたがなかなか勝てなかった。また目標としていた全国地区対抗予選も敗退が続いた。

集まれば東海魂で一丸となって戦ったが、残念ながら技術力と練習不足の結果はいかんともし難かった。

試合の記憶は勝った試合よりも負けた悔しい試合が鮮明に残っているものだ。

忘れもしない。東洋大に100点以上の差をつけられた試合だ。ノーホイストトライを何度も繰り返され、40年以上経った今でもその屈辱を鮮明に思い出す。

後輩諸君は我々にとって夢のまた夢であった全国大学選手権を争う強豪集団となった。

ラグビー部草創期に今と同じグラウンドで汗を流したことをOBの1人として誇りに思う。60代半ばを過ぎ、たくましい後輩たちの闘志ある戦いぶりを観戦するのが楽しみである。

東海大学ラグビー部創部50周年、ますますの発展を祈っています。

(八下田義徳)

理工科系リーグ戦

監督 西山常夫
主将 安斎恵治(3年生)

理工科系リーグ戦
全勝優勝

全国地区対抗大学大会
都予選優勝
関東地区代表予選敗退
0-3 横浜国立大学

1968年度(昭和43年度)卒業

有馬 美照(動機)/主将		
八下田義徳(電気)		
鳥山 守(電子)		
江原 和芳(広報)		
斉藤 貞明(経工)		
大澤 篤(経工)		
近松 雅之(建設)		
松浦 淳(動機)		
獅子内純雄(S44電気)		
斉藤 栄作(S44光)		
稲田頼太郎(土木)		
杉本 義夫(機械)		

1969年(昭和44年) なぜ我々は地区対抗戦で戦ったのか

我が部は1972年に全国地区対抗大学大会で優勝したことで同大会を脱退し、翌年から関東大学リーグ戦グループ3部に加入し、現在はリーグ戦グループ1部に所属しております。では、なぜリーグ戦グループが発足した67年より加入せず、全国地区対抗大学大会を選択したのか、創部50周年記念誌発行の機会に、その訳をここに書き留めます。

ラグビー部に入部した当時、部員は60数名で、春は「理工科系リーグ戦」、秋は「全国地区対抗戦」に加盟していた。そのころ、関東大学ラグビー界では早・慶・明など伝統校の主張する対抗戦方式と、法・中・日・専の戦後頭角を現した新興校が主張するリーグ総当たり方式の問題で、試合日程が組めなくなった法・中・日・専が新リーグ発足準備をしていたようだ。我が部にも66年春に新リーグ戦のマネジャーから、加盟のお誘いを受けたが、「我が部は不参加という方針を伝えた」旨、先輩より伺った。新リーグ戦は法政・中央・日大・専修・防衛・東洋・国士・大東の8校総当たり制で67年秋から開催される運びとなり、その後加入校の増加に伴い、現在は1部リーグから6部リーグで構成されている。

我が部は67年に部長兼監督として西山常夫先生が就任されたことをきっかけに、目標を「全国地区対抗大学大会において全国制覇後に対抗戦グループに加入を申し入れる」と立てた。その理由は、当時対抗戦グループの青山学院、日本体育、成城が全国地区対抗でそれぞれ優勝後、対抗戦グループに加入している経緯があったため、我々も全国地区対抗での優勝が登竜門であると思っていた。

68年には、全国地区対抗・東京都予選まで勝ち上がったが、関東代表戦において横浜国大に惜敗した。翌年には大越主将のもと、全国地区対抗の全国大会に初出場したが1回戦で敗退し、残念ながら私たちの時代には対抗戦加入までの入口に到達することはできなかった。

その後も「全国地区対抗制覇後、対抗戦グループ加入」という大目標は各年代の主将を先頭に全員が持ち続けた夢であった。72年1月に山上主将のもと「全国地区対抗制覇」を成し遂げ、「対抗戦グループ加入」への入口に到達したのである。しかし同年春の対抗戦マネジャー会議において我が部の「対抗戦加入」の願いはかなわず、その結果「リーグ戦3部加入」という選択に至った。この経緯については当時のOB諸氏から語っていただきたいと思う。

創部から10年間、リーグ戦発足時加入の機会もありながら、あくまで対抗戦加入を目指した当時の、現役の純粋な気持ちと闘志があったことを我が部史の一部として残したく思う。

(安齋恵治)



理工科系リーグ戦

監督 西山常夫
主将 大越永司(3年生)

理工科系リーグ戦
全勝優勝

全国地区対抗大学大会
都予選・関東地区予選優勝
全国大会1回戦 11-13 東北学院大学

1969年度(昭和44年度)卒業

安齋 恵治 (S45動機) /主将	中西 貢 (S45通信)
平島 正道 (土木S46体育) /副主将	下釜 靖宏 (建築)
土坂 文生 (土木) /マネジャー	二神 昌彦 (建築)
大井 一泰 (S45建設)	川口弥一郎 (建築)
伊藤 敏雄 (土木)	真田 保幸 (S45通信)
皆川 健一 (電気)	鳥 均 (土木)
松浦 重雄 (海土)	柴山 義明 (通信)
星野 幸雄 (応数)	荒川 健一 (建築)
新倉 健 (S45建築)	
若山 一 (S45動機)	
野崎 一雄 (応物)	
八代 裕 (生機S46体育)	

1970年(昭和45年) 初めての合宿所を設置

「全国地区対抗初出場」——それは1970年の第20回記念大会、私が3年生で主将のときである。67年に体育学部が新設され、翌年にはラグビー理論に長けた西山監督体制となった。有望部員の体育学部への入学、4年生までの部活継続（それまでは3年生で終了）、新しい練習法の導入など、ラグビー部の環境が大きく変わった。

それまで全国大会予選での敗退が続いていたが、順調に力をつけ、69年に東京都予選を突破、関東地区代表戦で勝利して念願の全国大会への出場権を手にした。

当時のチームはフォワード平均で体重が72kg、身長が172cm前後と大きくなかったが、フォワード戦では互角以上に戦い、フォワード・バックス一体となった組織プレーで、スピードある展開を身上としていた。チーム内にはそれぞれ高い能力を持った選手はいたが、なんといってもポイントゲッターは100mを11秒台で走り、相手防御を突破する技量を備えていた2年生の快速ウイングであった。

全国大会での前評判は、予選の試合内容、結果などから東海大学は「ダークホース」と報じられ、我々も初出場ではあったが「優勝」の2文字を目標に名古屋へ乗り込んだ。

結果論となるが、この大会で2つの反省点がある。

1つは名古屋入りして複数の部員が風邪をひき、2人のレギュラーが試合出場不能となったこと。もう1つは全国大会対策としてフォワードの大型化を目指し、ロックだった1年生を急造フロントローにしたが、スクラムで強力なプレッシャーを受けて苦戦を強いられ、目指していたスピードある展開ラグビーと、ポイントゲッターのウイングを生かす試合運びができなかったことだ。主将の責任である。そして4年生のフォワード選手が試合後半に頭を強打して脳震盪を起こし、意識もうろうの中でプレーを続行したのも不運だった。結果は1回戦で東北学院大学に11対13で敗れ、悔しさといくつかの教訓を残し全国地区対抗は終わった。

私が4年生時の特記事項として以下の4点を挙げる

- ・主将が3年生から4年生に移行（私が3年生、4年生と主将を継続）
- ・初めての合宿所（寮）を伊勢原に設置
- ・学生運動激化のため大学構内が立ち入り禁止となり、練習用グラウンドと部員の士気確保に苦慮
- ・第21回地区対抗の地区予選決勝で敗退し、主将の私は試合を欠場。私のラグビー人生でいちばん悔いの残る出来事となった

最後に、東海大学で素晴らしいラグビー仲間と指導者に恵まれたことに感謝したい。
(大越永司)



理工科系リーグ戦

監督 西山常夫
主将 大越永司

理工科系リーグ戦
全勝優勝

全国地区対抗大学大会
都予選決勝敗退

1970年度(昭和45年度)卒業

大越 永司 (応理) /主将	正本 純治 (電気)
佐藤 憲司 (光) /マネジャー	寺田 研一 (S46電子)
小野 健生 (土木)	山本 和雄 (広報)
高木 治夫 (動機)	真野 洋二 (体育)
大西 秀幸 (体育)	会田 悟 (体育)
長田 守 (体育)	
斉藤直比古 (経工)	
川久保芳男 (S47土木)	
中溝 正雄 (海土)	
吉沢 峯人 (建築)	
安間 孝明 (物理)	
太田 述久 (体育)	

1971年(昭和46年) 合宿所の継続を誓う

東海大学ラグビー部創立50周年記念に1971年当時の思い出を依頼され、41年前を思い出してみ
る。1年時に14人ほどが入部したが、4年生までラグビーを続けたのは三須君・田中君・渡辺君・
私(湯田)の4人だけだった。

私たちの時代の東海大学ラグビー部は、同好会的なチームからもっと強いチームを目指そうと
した時代だと思われる。私たちが1年生のときに西山先生が監督に就任され、「4年間で強いラ
グビー部にしよう」と目標を掲げた。ちょうど私たちが4年生のときに4年計画の最後の年だっ
た。しかし、全国地区対抗戦の東京都予選決勝で学習院大学に敗れ、全国地区対抗戦に出場でき
ず、私たちの大学ラグビー生活も終わってしまった。

西山先生のつてもあり私たちが3年生のときに、明治大学の松尾雄二選手の父上の紹介で、伊
勢原市内の空き家を合宿所にしようと先輩たちが計画。有志が集まって炊事当番を決めて合宿所
生活がスタートした。だが、伊勢原駅から遠く通学に不便なので、湘南校舎に近いアパート1棟
を借り上げて移転した。1棟借り上げなので満室にならないと家賃が足らず、メンバーは夜間ガー
ドマンのアルバイトを交代で行って家賃を補填し、合宿所を維持した。今の合宿所に比べれば合
宿所といえるものではないが、この合宿所の流れはなくしてはいけないと思い継続した。

私たちの年代の中心の選手といえば、快速ウイング三須君である。三須君にボールが回ると必
ずとっていいほどゲインラインを突破し、トライもよく決めてくれ、私たちにとっては頼りな
くなる選手だった。三須君の子どもも親の血筋を受け継ぎ、東海大学ラグビー部に入部し、学生・
社会人でもとても活躍していた。

私たち4人は大学を卒業してお互い離ればなれになった。
やがて結婚をして子どもができてからは、年に1回、大学ラ
グビー部の合宿に合わせて8月下旬の土・日曜に家族で菅平
に集まっていた。子どもが大きくなるに従って子どもと奥
さんが参加しなくなり、私たち4人の集まりとなっていくた。
先輩の江原さん・近松さん・小野さんたちも参加し、今でも
旧交を深め、学生を応援している。



東海大学ラグビー部が全国大学選手権で優勝することを心
から願っております。

(湯田三夫)

全国地区対抗大学大会

監督 西山常夫
主将 湯田三夫

理工科系リーグ戦脱退

全国地区対抗大学大会
都予選敗退

1971年度(昭和46年度)卒業

湯田 三夫 (体育) /主将	
渡辺 等 (経済) /マネジャー	
田中 啓自 (政治)	
三須 秀夫 (体育)	

1972年(昭和47年) 決勝の日の朝の歌

40年前である。当時は全国地区対抗大学大会で優勝し、対抗戦グループに入ることが目標であった。下級生には優勝さえすれば、次年度からは早稲田・慶應・明治といった伝統校・強豪校と試合ができると言い続けてきた。

折しも新入生の中に、袋館君(後の監督)・白浜君・渡辺君といったサイズのある即戦力のフォワードが大量入部してきた。このフォワードをまとめたのが、3年生でフォワードリーダーの小地沢君である。優勝後、新聞紙評において「もっとボックスを走らせるべきだ」というようなことが書かれたが、今考えてもやはりあのフォワードは強く、フォワードを率いた小地沢君の力は「大」であった。

ボックスにおいては、絶対的トライゲッターであった三須先輩の穴を埋めることが課題であった。エース不在のボックスではあったが、4年生3人、3年生2人とレギュラーには上級生が多かった。特に4年生の堀内君(故人)・前田君は経験年数は浅いのに、下級生にレギュラーポジションを渡さず決勝まで戦い抜いた。フォワードの頑張りと同様、優勝できた大きな要因である。

決勝の相手は福岡大学。当時、全国大学選手権の常連校だったが、この年は福岡工大に敗れ地区対抗に出場してきた。決勝の日の朝は、緊張のためか全員がひどく無口だったことを覚えている。口数は少ないが、宿舎から試合会場まで誰ともなしに、自然発生的に、校歌・応援歌・建学の歌を歌いながら歩いていった。ああした一体感は人生でなかなか味わえない経験であった。

決勝の試合終了後、祝勝会もそこそこに、夜、現地解散となった。もう1泊する金銭的余裕がなく、マネジャーの浜谷君(故人)や監督の西山先生は、勝ち進むにつれ経済的に苦勞していたようだ。そういえば関東代表となってから、キャプテンとして西山先生に同行し都内各企業に寄付をお願いしに行ったことも思い出す。

前述したように、優勝したからには翌年から対抗戦グループ入りと信じていたが、なぜかゲームを組んでもらえずリーグ戦グループに参加した。問題がいろいろあったらしいが、機会があればそのあたりの詳しい事情を後輩たちに聞いてみたい。

だが対抗戦に劣らずレベルの高いリーグ戦グループでもまれたことにより、大学選手権決勝まで行くようなチームになったことは、結果的にはよかったことだと思う。

最後に私事ではあるが、東海大OBの加治屋君がキャプテンをしているチームで、60歳を過ぎた今も赤いパンツをはいてプレーをしている。子ども・孫と一緒にラグビーをしながら東海大学ラグビー部が日本一になることを応援し、夢見ている。

(山上良一)



全国地区対抗大学大会

監督 西山常夫
主将 山上良一

都予選・関東地区予選優勝

全国大会優勝
1回戦 55-4 熊本大学
準決勝 31-0 帯広畜産大学
決勝 21-17 福岡大学

1972年度(昭和47年度)卒業

山上 良一 (S48英文) /主将
浜谷 裕幸 (体育) /マネジャー
前田 忠男 (経済)
堀内 公男 (応物)
長門 充 (海工)

1973年(昭和48年) 明大、近大に感謝と敬意

1973年度は、東海大学がリーグ戦に参加をした初めの年だ。当時のリーグ戦は1部から3部までの構成となっており、3部からの参加となったわけだが、このころから一段と強化を図りつつある東海大学と、部活の域を出ない他チームとの差は大きく、ほとんどの試合で下級生中心のチーム編成にもかかわらず100点ゲームであったと記憶している。当時は30分ハーフ、トライが3点(現行は5点)のルールなので、その内容たるや推して知るべしといったところだ。3部で1位となり、2部との入れ替え戦も相手が棄権をして不戦勝、2部へ昇格となった。この入れ替え戦を一つの山と考え、気合を入れていたメンバーは、みな拍子抜けし、試合ができないことになりがっかりしたものである。

リーグ戦に初参加したシーズンでは、対抗戦グループの中で明治大学が唯一試合を組んでくれた。伝統校、強豪校との試合を切望していた我々は、非常にありがたい思いで気持ちを高めて試合に挑んだものだ。実力はもちろん、すべての面で我々のかなう相手ではなかったが、この定期戦は、その後しばらく続くこととなり、まだまだ強くもない新興チームに胸を貸してくれる明治大学に感謝と尊敬の念を深くしたものである。

さらに、この年度から近畿大学との定期戦が始まったことも記すべきことと思う。試合は花園ラグビー場のメーングラウンドで行われたことから、初体験の花園ラグビー場に感激した部員も多く、設定をしていただいた近畿大学関係者のご尽力にたく感謝した。この試合の結果？ ん〜負けたような……。近大との定期戦は現在まで続いており、今では両チームともに関東、関西の大学ラグビーを代表する強豪チームになっているのは感慨深いものがある。

多くの方々のご助力を得ながら、小さなお山の大将が少しずつ広い世間に踏み出していく基点の年度であったと思う。それまでになかった経験をしていく中で、自分たちの力不足を感じ、名実ともに強豪となるには通り一遍の努力では成し得ないのを感じた年でもあったようにも思うのである。

その後、40年近い年月を経た現在では、東海大学は日本一を狙う強豪チームとなり、この間、並々ならぬ努力をされたスタッフ、選手はもとより、ひとかたならぬご協力とご助力をいただいた、学校関係者をはじめとした各位に対し、感謝をいたし敬意を表わすとともに、今後もさらなる努力とご協力をお願いいたし創部50周年の寄稿とします。

(山本洋一)

関東大学ラグビーリーグ戦3部

監督 西山常夫
主将 小地沢千秋

関東大学ラグビーリーグ戦加盟

6勝0敗 優勝(戦績不明)
入れ替え戦不戦勝 2部昇格

1973年度(昭和48年度)卒業

小地沢千秋(体育)/主将	久場 健(土木)
山本 哲男(政治)/副主将	及川 健作(体育)
寺本 正好(金属)/主務	
山本 洋一(S49土木)	
白井 好明(体育)	
市原 隆久(体育)	
小泉 忠之(S49体育)	
塩沢 哲夫(体育)	
田崎 恵一(土木)	
北爪 勇(体育)	
岩城 英世(海科)	
飯田 敏昭(機金)	

1974年(昭和49年)うれしかった法大OBの言葉

東海大学ラグビーフットボール部、創部50周年おめでとうございます。

7、8年前、不惑のチームメイトであった法政大学OBの方と、東海大学対法政大学のゲームを熊谷ラグビー場に観戦に行った折、法政大学OBの方から「東海大学は強くなるよ」とお褒めをいただきました。私自身、当時の東海大学の選手の出身校や高校時代どんな活躍をしていたのかといった情報は知らなかったもので、その方からいただいた東海大学に関する情報を記入した紙片を見て驚き、期待を抱くようになりました。

対戦相手から褒められ、警戒されるのはうれしいことであり、強くなっているのだなと実感しました。その後、リーグ戦で優勝し、全国大学選手権に出場するのを見て、法政大学OBの方が言っていたことが現実となり、監督をはじめ、部員たちの頑張りがあったことを実感しました。東海大学ラグビー部出身の選手がトップリーグやワールドカップで活躍しているのを見るにつけうれしく、時代の趨勢を感じます。

私たちの時代は、現在のように体育学部が中心ではなく、工学部、政治経済学部、海洋学部、理学部などの部員もいた。入部者の半分くらいが高校でラグビーを経験してきた部員で、あと半分は入学時の勧誘やラグビーに興味があって入部した者などで構成されていた。まして女子のラグビー部員など想像もできなかった。当時は東京・世田谷に唯一の女子チームがあったくらいである。

また現在のように、本格的に学生がラグビーに打ち込むというのも時代を感じさせる。私たちが3、4年生の時は、全国地区対抗で優勝し、対抗戦リーグに入ろうか、リーグ戦に入ろうかと検討していた時期でもあったように記憶している。その後、リーグ戦に所属し、昨今の成績を残せるまでに「強くなった」母校ラグビー部を誇りに思う。

これまでの50年でここまで来たのですから、これからの50年はジャパン・ラグビーをリードするような、人材なり、戦術面で貢献できる東海大学ラグビー部になってもらいたいと期待しています。

(伊澤 茂)

関東大学ラグビーリーグ戦2部

監督 西山常夫
主将 前田俊英

5勝1敗 2位 (戦績不明)
入れ替え戦敗退 (戦績不明) 2部残留

1974年度(昭和49年度)卒業

前田 俊英 (体育) / 主将	
荒井 和男 (社体)	
飯野 博巳 (動機)	
伊澤 茂 (物理)	
桜井 憲一 (生機)	
杉岡 一郎 (光)	
藤本 憲一 (S50土木)	
小林 史郎【旧姓本間】(体育)	
松原 敏一 (経済)	
吉田 雄平 (政治)	
若林 康二 (制御)	

1975年(昭和50年)控え部員のうれし涙(リーグ戦1部昇格)

我々の学年は、西山先生が部長・監督に就任し強化を始めて5年目にあたる。入部者は14名で、経験者10名、勧誘活動での入部者(初心者)4名。初心者だった工藤はその後、社会人で日本代表入りした。入部当初から、全国地区対抗戦で優勝し対抗戦グループ入りするのが目標と聞かされていた。練習は3月末から始まり、7月はオフ。夏は8月初めから再開し、11月末で終了した。夏合宿は終盤に根子岳山頂折り返しのマラソンがあり、当然、歩く者多数であったが、ラグビー部の名物行事になることを願い上位入賞者には豪華賞品が提供された。最終日にダボスの丘まで1年生全員で駆けのぼり、ラグビー部のバッジ授与式が行われた。この行事で正式な部員になった気がしたものだ。

我々の4年間の公式戦戦績は負け1回のみである。1年時は全国地区対抗において関東地区予選を勝ち抜き全国大会で優勝、2年時はリーグ戦3部に加盟し全勝優勝、4年時には2部で全勝優勝である。だが3年時に重要な1部との入れ替え戦で負けた。1部昇格は当然と思っていた我々にとって、勝負の厳しさと悔しさを味わった試合である。最終学年の目標はおのずと「2部優勝および1部昇格」。全員で真剣に取り組んだことが懐かしい。

4年時は、とにかく1部昇格を強く望んでいた。1975年12月14日、東京農業大学グラウンドで国士館大との入れ替え戦。前日でも授業を終えた夜に練習を行ったため、翌日昼の試合での体力消耗はかなりのものだった。後半スタミナ切れから防戦一方になったが19-10で勝利し、ノーサイドの笛が鳴った瞬間、グラウンドの周りにいた先輩や部員が万歳した。控えに甘んじていた同期がうれし涙を流していたことも忘れられない。

今でも語られるのは、1年生のとき全国地区対抗戦で優勝して関東対抗戦グループに加入する予定が、対抗戦加入校から「加入しても東海大とは試合はできない」と言われた悔しさと、「全員一致で関東リーグ戦グループ3部から再出発」と決意したことである。しかし明治大学だけは「試合を組む」と返事してくれたとのことで、みんなで「さすが北島監督だ」と話した記憶がある。

「充実感」とは目標を達成してのみ味わえるというのが、学生時代は充実感に浸ったよき青春であった。卒業後、同期が大学の監督になり、公式戦のチケットがさげないときはみんなで手伝うなど、卒業してもみな仲間を大事に思っている(今、同期の1人がベッドで意識もなく苦しんでいる。遠く離れ何もできないことがもどかしい)。

東海大ラグビー部は全国大学選手権準優勝を経験し日本一にあと一步である。地区対抗で全国優勝した当時の4年生が「日本一になるのは我々が最後だろう」と言っていたが、目指す頂上の難しさに違いがあるものの大学日本一になり当時の先輩を見返してほしい。
(白浜淑郎)



関東大学ラグビーリーグ戦2部

監督 西山常夫
主将 渡辺 勝

- 45-16 拓殖大学
- 48-0 東京農業大学
- 94-0 横浜国立大学
- 134-0 獨協大学
- 72-0 千葉工科大学
- 145-3 亜細亜大学

6勝0敗 優勝
入れ替え戦 19-10 国士館大学
1部昇格

1975年度(昭和50年度)卒業

渡辺 勝(体育)/主将	
飯野 真(体育)	
栗田喜久男(原子)	
工藤 隆志(社体)	
白浜 淑郎(経工)	
佐藤 芳夫(経済)	
袋館龍太郎(建築)	
奈良 和利【旧姓三上】(体育)	
小畑耕一郎(社体)	
関根 秀彦(体育)	

1976年(昭和51年)「走り勝つ」をチームの命題に

我々の年代は、ラグビー部史上、大きな転換期に遭遇した年代といえる。

我々の入部時期は、ちょうど東海大ラグビー部が対抗戦に加入しようとしていたところで、「もし対抗戦に入れば台風の目になるのではないかと、うわさされるようなチームであった。

そうした中、高校時代、県代表経験者や各チームの主将経験者が多く集められた。それが我々の年代であった。もちろん我々も対抗戦で戦い活躍する自分の姿を夢見ていた。しかし、それはかなわないこととなった。

伝統を重んじる対抗戦への参加は、当時新興チームであった東海大にとってあまりにも厚い壁であった。その報告を受け、小地沢新主将の顔は苦悩にゆがみ、目には光るものがあった。忘れられない出来事である。

その後、チームは心機一転、リーグ戦に所属し「大学日本一」の目標に向かい連戦連勝の常勝チームとなった。そして3年目のシーズンには1部昇格を果たしたのである。

最終学年を迎えた我々は、あの苦悩の選択から大学日本一も狙えるところまできた喜びとともに、その重責を感じていた。いやが応でも周囲の期待も大きく、試合となれば多くのOBが集まり盛り上がっていた。

そんな中、チームは春から波乱のスタートを切った。それは就任したコーチとの衝突である。それは学生主体のチームづくりを目指す学生と、勝つための指導を目指すコーチとの間に生まれた衝突であった。最終学年となった我々にとって、それまでの先輩たちが培ってきた「自主独立の精神」だけは守りたいとの思いから、ついには衝突することとなったのである。

今思えば青臭い精神論であるが、当時はそれこそが東海大ラグビー部なのだ、意気込み燃えていたのである。それも懐かしい思い出である。

その後、和泉武雄氏(早稲田OB)が指導することとなった。彼の理論は我々の求めるものであり、我々も心を一つにして最後のシーズンを迎えるに至った。

チームの命題は「走り勝つ」だった。夏合宿では連日よく走った。試合後、ボールが見えなくなってもランパスをやったこともあった。公式戦でその真価が発揮できたのが、当時強豪だった大東大戦だった。結果は引き分けだったが、チームとして自信が持てた試合だった。

今、大学日本一を競うまでとなった母校の応援席に座り、走る選手の姿を見るたび、同じ志を抱く東海大ラグビー部の同僚として、年代をこえた共有を強く感じる。きっと、そのころの自分をそこに見ているのだろう。

(岡部 仁)



関東大学ラグビーリーグ戦1部

監督 西山常夫
主将 朝倉雅彦

7-68 日本大学
0-49 専修大学
12-31 中央大学
25-26 東洋大学
28-28 大東文化大学
31-7 法政大学
47-12 防衛大学

2勝4敗1分 6位

1976年度(昭和51年度)卒業

朝倉 雅彦(体育)/主将	新原 成和(社体)
清水 清【旧姓塩沢】(体育)/副主将	小池 幸人(体育)
岡部 仁(S54土木)/マネージャー	
押田 貞雄(体育)	
松田 道明(電気)	
近藤 伸一(社体)	
渡辺 治(体育)	
八木 一弘(土木)	
小宮 茂(S53教養)	
今井 英夫(S52.9社体)	
島守 洋介(社体)	
加藤 一郎(体育)	

1977年(昭和52年) 残留をかけた争いに終始

1977年度は、念願の関東大学リーグ戦1部昇格を果たして2年目のシーズンとなる。チームの特徴といえるものは乏しく、したがって平凡な戦力ゆえに際立った戦術と呼べるものもなかった。当然、成績も7位とふるわなかった。

この年はリーグ下位の東海・東洋・大東文化・国士舘と、上位チームとの力の差が際立ち、客観的に戦力分析をしても上位を狙う戦力とはいえず、1部に踏みとどまることが目標のようなシーズンだった。当然、当時はこのような目標設定をするはずはなく、あくまでも交流戦出場とその先を見据えてはいた。

このシーズンで記憶に残ることはと問われると、すぐには思いつかないのだが、あえて挙げれば大東文化・国士舘・東洋との1部残留をかけた争いだろう。幸い、自力で1部にとどまる戦力を維持し続けてきたことは、その後の歴史からも自明ではあるが、勝利が遠かったという現実はいさざまな点で常勝を狙い得るだけの環境が整っていなかったことも意味していた。

先輩方が選択した関東大学リーグ戦グループ加盟にあって、たどり着かねばならなかった1部の重みを強く意識しながらも、一方では華々しい戦績を残すことのできない現実に苦しんでいた時期であった。

そのようなチームの中でも華といえる選手がいた。ウイングの加藤満である。彼のことは高校時代から知っていた。誰からもラグビー選手とは気づかれないであろう小柄な体格であり、加えてお世辞にも技能的とはいえない選手でもあった。しかし、この年の大学ラグビー界において、彼をしのぐ走力を持つ選手はいなかった。彼にボールが渡る前にマークをずらし、彼の走るスペースさえ確保できればいいはずであったが、実際にそのような戦術がとられることはなかった。私は個人的に彼を高く評価していたが、なぜか他大学からの高い評価に比して、チーム内での評価がそれほどではないことが不思議でならなかった。むしろ、こんな話を彼にもチームメートにも話したことはないが、彼はリーグ戦グループのベスト15に選出された。

特筆すべき出来事としては、1部昇格後に師として慕っていた西山教授が部長および監督から退き、新たな監督・コーチによる指導体制となったことは、東海大ラグビー部にとって大きな転機と捉えるべき出来事だろう。他の部員の受け取り方は知らないが、個人的にはOB会を含め、組織全体のゴタゴタした雰囲気と現役学生も巻き込まれていたとの認識が強かった。関係者の「強いチームにするために」との思いを感じないわけではなかったが、私の描く学生スポーツの姿とはほど遠く、いや気さえ感じていたというのが本心である。大好きだったはずのラグビーを楽しく感じられなかったシーズンでもあった。

30年以上も前のことを思い出しながら、現役世代の活躍とさらなる飛躍を祈り、一文とさせていただきます。

(菅田圭次)

関東大学ラグビーリーグ戦1部

監督 西山常夫
主将 与那勝己

9-38 日本大学
4-26 専修大学
20-42 法政大学
24-16 国士舘大学
27-19 中央大学
12-20 東洋大学
16-25 大東文化大学

2勝5敗 7位

1977年度(昭和52年度)卒業

与那 勝己 (体育) / 主将	
菅田 圭次 (S54体育) / 副主将	
永沢 嘉樹 (体育)	
加藤 満 (経営)	
塩田 和広 (体育)	
原 和雄 (社体)	
高梨 保洋 (武道)	
関根 正則 (S53経済)	
知花 毅 (体育)	
小沢 勇司【旧姓鈴木】(体育)	

1978年(昭和53年) リーグ戦で初の2位に

OB会より原稿執筆依頼が来た。

卒業して36年あまり、当時のチームの特徴、中心選手、思い出など、言われてもなかなか思い出せない。私より上の先輩たちもおさらであろう。3年前に発行された「関東大学ラグビーフットボール部連盟四十周年記念誌」が手元にあるが、それを参考にして、ざっと書かせてもらう。

当時、18名か19名の入部で最終的に4年間ラグビー部に在籍したのは約半分の9名。おそらく我々の時代からラグビー部を強化するというので、高校の全国大会出場チームからも入部していた(秋田工、日川、新潟工など)。

しかし、それら有力チームからの入部者は、数多くが工学部に入学していたため、途中でやめるとか授業などの関係で最終的に半分近くいなくなっていたのが現状であった(これは一つ下の松下君の代もしかり)。

1年時にリーグ戦1、2部の入れ替え戦で1部に初昇格してもらい、2、3年時はなんとか入れ替え戦にも出ず1部をキープして、いざ4年を迎えた。その年は4年がわずか4名と若いチームで、その年より次年以降を期待していたチームだが、シーズンに入ると日大、専大には敗れた

が、1位の国士館大に大差勝ち。当時としては最高の戦績となるリーグ戦2位に入った。対抗戦との交流ゲームは慶應大に敗れる。ちなみに当時の中心選手のバイスキャプテンはいまだに慶應大との交流ゲームを大学選手権と思っている。説明するのもおっくうなのだが。

とにかく50年間のわずか4年在籍の代で人数的にも少ないが、多少は名を残した代ではなかろうか。現OB会長がいまだに直立不動になる人物もいることだし……。

最後に苦言を一つ。現ラグビー部スタッフにもう少しOBがいたらいいなと思うのは私だけかな……。

(薄井智明)



関東大学ラグビーリーグ戦1部

監督 和泉武雄
主将 本田信夫

30-4 国士館大学
33-20 法政大学
40-15 中央大学
15-21 日本大学
19-37 専修大学
18-4 東洋大学
45-10 拓殖大学

5勝2敗 2位

交流戦試合出場
0-36 慶應義塾大学(対抗戦3位)

1978年度(昭和53年度)卒業

本田 信夫(工化)/主将	
榎原 進治(経営)/副主将	
宮野 松悦(政治)	
鈴木 寿(体育)	
大城 浩一(体育)	
来住 恭生(体育)	
薄井 智明(S54経済)	
中村 豊(工化)	
田中 義雄(生機)	
渡辺 文雄【旧姓埜】(体育)	
山田 能敬(社体)	

2012年(平成24年) 感謝の気持ちを持ってプレーを

「第48回全国大学ラグビーフットボール選手権大会 1回戦敗退」。その瞬間から、新たなシーズンのスタートを切ることになった。1回戦敗退という事実を受け止め、今年度掲げたスローガンは「Drastic Change」。すべてにおいてチャレンジし変化していくという意味だ。私たちが年間を通し求める変化は、今までの東海大学にはない、アタッキングラグビーである。ディフェンスを強化し続けた例年と比べ、今年度はアタックを中心としたラグビーで勝負していくことを目標とした。

歴代の主将は11年もの間フォワードの先輩方が務めていたが、変化を追い求める年に11年ぶりとなるバックス主将に私が就任することになり、その責任の重さは予想以上だった。私のポジションがSOということもあり、試合や練習において広い視野で全体を見ることができると、リードしていくことを強く求められていることを自覚している。

チームにまとまりを持たせるために、副主将・三上匠、フォワードリーダー・谷昌樹、バックスリーダー・宮田一馬、スクラムリーダー・阿部浩士らとともにチームの中心となり、練習・試合中のプレーについてのミーティングを日々行っていた。特にフォワードとのコミュニケーションをとることは大切であり、リーダーたちとの意見交換も欠かせない。また、それだけではなくマネジメントグループとのコミュニケーションはとても重要だ。主務・吉田一二貴、外務・片井新矢、副務・佐藤智彰を中心に運営やクラブ全体の管理をしているが、彼らは選手であるにもかかわらず、献身的に仕事を行ってくれた。さらに、女子マネージャーやトレーナーたちのサポートなくしては、活動は成立しない。そうした意味でも常に、感謝の気持ちを持ってプレーすることが大切なのは言うまでもないことだ。

今年度は創部50周年という大切な節目の時期を迎えた。その重みを全員が実感し、先輩方が築きあげてきた東海大学ラグビー部に新たな歴史を刻まなければと戦い続けてきた。まずは関東大学リーグ戦では2年ぶりにタイトルを奪取。初の日本一を目指して全国大学選手権に臨んだ。結果は筑波大学に敗れベスト4という結果だったが、最高の仲間と国立の舞台で戦えたことは一生の財産になるだろう。後輩たちには多くのご支援、ご声援を力にして、自分たちが達成できなかった大学日本一の夢をかなえてもらいたい。

(阪本圭輔)



関東大学ラグビーリーグ戦 1部

監督 木村季由
主将 阪本圭輔

34-12 流通経済大学
28-12 拓殖大学
39-18 法政大学
29-0 日本大学
59-7 中央大学
69-0 大東文化大学
112-0 関東学院大学

7勝0敗 優勝

全国大学選手権大会
セカンドステージ プールC
34-5 近畿大学
54-40 日本大学
45-36 明治大学
ファイナルステージ (準決勝)
26-28 筑波大学

2012年度(平成24年度)卒業

阪本 圭輔 (競技) /主将	村山 廉 (競技)
三上 匠 (競技) /副主将	浅川真次郎 (経営)
吉田一二貴 (体育) /主務	尾崎 士朗 (体育)
片井 新矢 (建築) /外務	高山 拓朗 (社環)
佐藤 智彰 (日文) /副務	折川 裕紀 (体育)
谷垣内 瞳 (法律) /マネージャー	佐藤 壮 (生涯)
谷 昌樹 (競技) /FWリーダー・備品管理長	林 直輝 (競技)
阿部 浩士 (生涯) /スクラムリーダー・第三闘勝館寮長	百武 優雅 (競技)
宮田 一馬 (競技) /BKリーダー	湯ノ迫 毅 (競技)
坂本 雄大 (競技) 統括寮長・寮会計	西村 一将 (体育)
小笠原 駿 (競技) 第二闘勝館寮長	高平 拓弥 (マネ)
阿曾 俊平 (競技)	林 明里 (社環)
五十嵐健二 (法律)	
松田 仁 (土木)	
扇 勇人 (日史)	
大澤 禎人 (体育)	
黒川 賢亮 (競技)	
玉井 瑛祐 (法律)	